

## 田口卯吉と経済学方法論議

——経済学協会例会に於て——

松野尾 裕

### まえがき

田口卯吉（1855～1905年）は「経済学」について議論することがよほど好きだったと見える。それを田口は自分の癖だといったことがある。

「昔者慈鎮和尚は、

人ごとにひとつの癖はあるものを我にはゆるせ経済の論  
と詠ぜしとかや。蓋し七百年前にありて <sup>あらかじ</sup> 予め余輩の為に詠ぜしならん  
乎」<sup>1)</sup>。

この一文は、1884（明治17）年の4月から7月にかけて『東京経済雑誌』上で展開された、田口の「経済学は何を論ずる学問なるか」と題する論稿に端を発した「経済学の釈義」をめぐる論争に、田口自らが終止符をうつために執筆した論稿の末尾に述べられたものである。この論争のなかで田口は、経済学は「富の学問」であるとする説（「英国学派」）も、また「価の学問」であるとする説（「第三学派」）も退けて、「経済学は人為現象に就いて論ずる学問なり」と一貫して主張し続けた。これは1878（明治11）年1月に公刊した自著『自由交易日本経済論』での主張以来のものであり、田口はこれをもって「英国学派」とも「第三学派」とも違う自らの立論をなし得ると考えたのかもしれない。

---

1) 田口卯吉「経済学の釈義に関して駁論諸子に答ふ」（1884年7月）『鼎軒田口卯吉全集』第3巻（吉川弘文館、1990年復刊）所収、238頁。

しかし、明治20年代に入る頃には、経済雑誌社＝経済学協会に集う人々の間には欧米の経済学界に台頭する新しい潮流への関心が確実に広まってくる。経済学の「新派」すなわちドイツ歴史派とオーストリア派の経済学への関心が急速に高まったのが、明治20年代から30年代前半のことであった。30年代中頃にはさらにマルクスの経済学説が視野に入ってくる。これらの新しい潮流は経済学協会の例会における演説でもって紹介されることになるのであるが、それらに先立ち経済学協会の会員によるこれに関するテーマの演説が下野経済協会<sup>2)</sup>の例会の席で行なわれていることが確認できる。すなわち、1889（明治22）年6月22日に開催された例会における宮川（塩島）仁吉の「経済学新旧両派の所説」についての演説と翌1890年12月21日に開催された例会での桑原啓一の「経済学の歴史的・統計的方法の必要」についての演説とである。これらの演説の内容に関する記録は、残念ながら前者については残されておらず、また後者については「経済学の道理は数学若くは物理学の如く、何れの時、何れの国に於ても一定不変なるものに非ず。時と所とに依り変すべきものなれば、適切に経済の事を講究せんと欲せば、須らく歴史と統計に徴せざるべからず。而して実業家の実験話は実に活歴史なり。故に経済学者は常に実業家の説を聞かざるべからず。実業家は又常に経済学者に其の所見を告げざる可らず。要するに実業家と経済学者とは平素最も密接の関係を有せざる可からざる旨を演説せり」と記されているのみである<sup>3)</sup>。こうした動向のなかで、田口卯吉自身、明治20年代中頃には「経済学の釈義」に変更を加えることとなるのである。

以下本稿では、田口のこの「経済学の釈義」の変更を告げる演説に始まる経済学協会の例会の席でくりひろげられた経済学方法論議を、演説の順を追って見ていくこととしたい。

2) 下野経済協会は1888（明治21）年12月に栃木県宇都宮に創設された経済学の研究・啓蒙団体であり、田口卯吉が主宰する東京の経済学協会とは姉妹関係にあった。下野経済協会の活動については、拙稿「田口卯吉と両毛地方——明治20年代前半の地方啓蒙と実業——」『愛媛経済論集』第12巻第2号（1993年）所収を参照。

3) 『東京経済雑誌』第476号（1889年6月29日）839～840頁、同第553号（1890年12月27日）933頁。『東京経済雑誌』は日本経済評論社によって全巻復刻されており、本稿における同誌からの引用は全て復刻版に拠る。引用にあたって変体がなを現代がなに改め、句点および濁音符を適宜入れた（以下同じ）。

## I 経済学の「新派」への関心

経済学協会の例会においては、毎回、主にその時々<sup>4)</sup>の時事的な関心事を話題とした演説が1本ないし数本行なわれることを常としていたが、1893(明治26)年12月16日に開催された例会での田口卯吉の演説は、そうした通例の話題からは離れて、経済学に関する純学理的な内容のものであった。『東京経済雑誌』に掲載されている例会活動の記録によれば、この日は「年末に際せしゆえ来会者は多からざりしも、此回より入会せられたる貴族院議員尾崎三良氏を始め、石橋重明、肝付兼行、阪谷芳郎、田口卯吉等の諸氏十有余名」が出席して行なわれている<sup>4)</sup>。いつもの通り会食した後、田口卯吉が「経済学の定義」と題して演説した。この日は当初、鬼頭悌次郎による「ヴァンクーヴァーの景況」についての話が予定されていたが、鬼頭が大阪への出張により出席できなくなったために田口が代ることとなったということである。

田口卯吉は「今日の時勢などに就きましては、大層縁の離れたことですが、経済学と云ふものは、どう云ふ学問であるかと云ふことに就きまして、私が予て考へて居ることがござりますから、其事を述べまして諸君の御一考を請ひ、且つ教を請ひたいと思います」と前置きした後、さっそく、自らの考える「経済学の定義」を次のように述べた。

「経済学と云ふものは、是れまで英国派の経済学者の説に拠りますと、メンタル・エンド・フ井シカル・サイアンス、即ち有形無形兼ねて居る学問と云ふ、<sup>デフニション</sup>定義がくつ付いて居りますのであります。然るに私は此経済学と云ふ学問はメンタル・サイアンスと云ふ方である、所謂心裡<sup>メンタル</sup>的の学問である、メンタル・フエノメナ即ち心の現象に就て論ずる学問の一種類であると云ふ考へを持つて居ります」<sup>5)</sup>。

田口のこの日の話は、かかる定義を行なう理由の説明についやされている。

4) 『東京経済雑誌』第706号(1893年12月23日)974～975頁。

5) 6) 田口卯吉「経済学の定義」『東京経済雑誌』第707号(1893年12月30日)所収、989頁、『鼎軒田口卯吉全集』第3巻収録。

その議論は2段に分かれる。まず田口は学問の定義を行なう。すなわち、「此<sup>サイアンス</sup>学問と云ふ言葉から説かなければならぬのでござりますが、要するに学問と云ふものは、どう云ふものかと言ひますと、ナチュラル・ロー即ち自然の理法と云ふものを説き明かすのが、<sup>サイアンス</sup>学問であると考えます」。「斯うしろの、あしろのと云ふことは、是れは教である、訓言である。聖人の教、賢人の訓、孔子の教とか、耶蘇の教とか、云ふのは、是れは悉く人が人の行は斯うしなければならぬ、あししなければならぬと云ふ教でござりますから、<sup>サイアンス</sup>学問ではない。学問と云ふものは自然の理法を説き明かすものでござります」(圈点原文。以下同じ)<sup>6)</sup>と田口は述べ、医学や天文学の事例を挙げてこれを説得しようとする。学問は「自然の理法」を研究するものである。これが田口による学問の定義である。したがって、

「経済学も一の学問であるならば、矢張り自然の理法のみを研究するものであらふと思ひます。国家の為に斯うしなければならぬ、あししなければならぬ、人間は斯うするが宜い、ああするが宜いと云ふなら、是れは学問ではない。唯人間社会と云ふものは斯う云ふ風に成立つて居るものだ、斯う云ふ自然の理法が行はれて居るものだと、其ナチュラル・ローと云ひませうか、メンタル・ローと云ひませうか、何にしろ自然の規則と云ふものが、行はれて居るものがあれば、経済学は必らず一<sup>サイアンス</sup>学問たるを得るでありませう。若しもメンタルにもせよ、又フ井シカルにもせよ、此社会に理法がなければ、経済学は学問にならぬ、一個の聖賢の教と同じやうなもので、<sup>聖賢の言ひなり次第に、変化するものになります</sup>。然るに経済学は聖人の教とは違ひまして一の理法を解明するものである」<sup>7)</sup>。

だから田口にとって、当時「保護論其他「ナショナルシステム」国家制と云ふやうなことを以て」論じられていた種々の政策論議が「学問」に属さないことは自明なのである。もしも政策論議が第一だとすれば「一国宰相が権力を振はなければ、国を富まし国の人民の幸福とならぬ、斯う云ふことになるでござ

7) 同上、989～990頁。

りませう、是れは丸で学問的の思想のない御話でありませう」<sup>8)</sup>と田口はいつている。田口は、人間の知的営みを、存在あるいは自然必然性の追究と当為の追究とに区別し、学問の課題を前者にのみ限定する。そして経済学をかかるとの意味での学問であると規定することによって、田口は、経済学の議論のうちに混り込む政治的夾雑物を明示化し、経済学の議論の真の拠り所——「理法」——を明確にすることに、なによりもまず意を用いようとしたのである。

そこで田口の議論は第2段に入る。田口がいう「経済上のロー即ち理法」とは何かといえば、それは「需要供給のかね合」である。田口の説明によると、イギリス経済学は、需要は例えば「此水が飲みたいとか、此肉が食いたいとか、此着物が着たいとか」といったようにすべて「メンタル即ち心理的理法」<sup>(ママ)</sup><sup>9)</sup>の支配を受けているのであり、他方供給は水にしても肉にしても着物にしても例えば「凶歳があれば米の出来が少ない」というようにすべて「フ井シカル即ち物質的理法」の支配を受けている、と論じている。「故に経済学と云ふ学問はフ井シカルメンタル物質的と心理的とかね合った一つの学問だ」ということになるのである<sup>10)</sup>。これを田口は批判して、「併ながら私は是に於て経済学と云ふ学問は全く心理的サイアンス学問だと云ふことを言ひたい」と主張する。その論拠は2つある。まず第1には「学問と云ふものは、メンタルとか、或は物質的とか、どちらかに属さなければならぬ、二つながら兼ねて居ると云ふことは、所謂論理的にどうも其体を得ないものである」。つまり田口にいわせれば「元来学問と云ふ一の単純なるもの」では「理法」の一元化が求められるというのである。第2には、ロビンソン・クルーソーの場合のように「一も外の人と交易する必要もなし、外の人を力に借ることもない」ような経済生活を議論の前提とするのであれば、なるほど「私の需要が強ければ一心不乱に米ばかり作」というように「全く物質的理法の支配を受けたものと、それから私の心理的需要とのかね合」だといえる

8) 同上、990頁。

9) 田口はメンタルを「心裡」と「心理」の2通りに表現しているが、その区別はかならずしも明確ではない。

10) 田口卯吉「経済学の定義」990頁。

であろうが、しかしながら「今此の人間が交易を致して、例へば私共が筆を作りて而して米を作つて居る百姓と交易をすると云ふ場合になれば、此米は供給とは云ひながら、最早や人の需要物になつて居」るのである。つまり人々の経済生活が交易関係で結び結ばれた「今日此経済社会に現はれて居る現象と云ふものは、全く人の手を経て心裡的<sup>メンタル</sup>になつて居る」ということができる。したがって、今日の経済社会にあつては、「需要供給のかね合」は結局のところ「向ふの需要と此方の需要とのかね合」ということになるのである。「ヴァリユウ（価値）とか、プライス（相場）とか、交易上に現はれたものが、重なる経済上の本尊でありませう」。この「価値」にしても「相場」にしても、それは「心裡の現象」として捉えることができる、というのが田口の主張であつた<sup>11)</sup>。田口はかつてロビンソン・クルーソーの生活もまた経済学の考察が及ぶところだとして、交易経済を前提に経済学は「価の学問」であるとする説を批判していたが、ここにおいて、この批判を撤回したことになるであろう<sup>12)</sup>。

経済学は「心裡の学問」だと定義した田口は、その「心裡の学問」の課題を次のように述べて、この演説を結んでいる。

「全く心裡の学問即ち人間が自分の幸福の爲め、自分の独立の爲め、自分の生計の爲めに、外物を要する、其外物に対するの需要即ちメンタルフエノメナ（心裡現象）の現はれ方に就ての論すべき学問である、斯ふ経済学と云ふものを解釈して宜からふと思ひます」<sup>13)</sup>。

田口卯吉にとって、経済学は人間ひとりひとりが自らの生計・独立・幸福のために外物に対していかなる行動をとるかということについて追究することを課題とするものである。そして、交易経済におけるその行動にはあらゆる人間に共通する「理法」を認めることができるがゆえに経済学は学問として成り立ち得るのだ、というのである。

11) 同上、990～991頁。

12) このことに田口も気づいており、田口は「此篇説く所は、嘗て余が経済学は孤独の生涯則ちロビンソン・クルーソーの場合にも及ぶと云へる語とは、矛盾する者也。故に其何れを可とするやも、猶は一考を要する所也」と、演説筆記録に付記している。同上、992頁。

13) 同上、991頁。

田口によるこの「経済学の定義」についての演説のあと、経済学協会の例会においてこの田口の主張に関連するような他の人の発言なり演説があったことは見出せない。田口自身はこの演説の末尾の箇所で「併し此考へは唯極大体の主意を漠と述べましたゞ<sup>い</sup>け<sup>ま</sup>のことで、十分に講究したい考へでござりますが、まだ講究する<sup>いとま</sup>違<sup>い</sup>もござりませぬ」とことわっており、自説をさらに展開する意図があったことをうかがわせるが、例会においてこれに続く演説は行なわれていない。しかし、経済学協会のメンバーのなかでは、イギリス経済学以外の経済諸学説に対する関心が高まっていったことは、例会の席で次のような演説が行なわれるようになったことから十分に推測し得る。

田口による「経済学の定義」の演説からちょうど2年後、1895（明治28）年12月21日の例会において桜田助作が「講壇社会党主義の経済学」について演説し、さらに翌96年2月15日の例会では松本君平が「最新経済学派に就て」と題してオーストリア派の経済学説を紹介する演説を行なっている。

1895年12月21日の例会には「池田謙三、伊藤祐穀、波多野伝三郎、大橋新太郎、横井時敬、田辺朔郎、田口卯吉、高橋義雄、曾我祐準、坪谷善四郎、成瀬隆蔵、中隈敬蔵、植村俊平、乗竹孝太郎、草野門平、松本君平、藤尾録郎、小手川豊次郎、江木保男、朝倉外茂鉄、佐久間貞一、柵瀬軍之佐、桜田助作、木村半兵衛、塩入太輔、望月二郎、鈴木良輔等」と27名余の出席が記録されている<sup>14)</sup>。桜田は、望月二郎の勧めで「講壇社会党主義の経済学」というテーマで話をするようになったと前置きして演説に入った。まず桜田はこの日の話の要点を次のように述べている。

「講壇社会党主義の経済学は近頃非常に進歩をしたが、此派はアダム・スミスの如き大家が出て一派を作つたのではない。ジャン・バチスト・セー、パスチヤの如き今世紀の初に<sup>あた</sup>方つて有力の経済学者に反対して別に出した説に付けた名だらうと考へる。それ故に社会党主義の経済学者中にも学説が往々違つて居る様で全く一定して居ると云へまいと思ふ。其違つて居る所の大体

14) 『東京経済雑誌』第806号（1895年12月28日）1062頁。

を申せば旧派即ち正統学派と称するものは物を主として論じ、新派の学者は物より人を主とし富と人との関係を論ずる様に思はれる。而して又旧派の学者は個人主義を操り自由放任の主義を採つて居る。アダム・スミスの如きも元仏国の「フイジヨクラット」グール子一、ケー子一等の派から出て居る。然るに新派の学者は人間社会の幸福を謀ると云ふ考を有つて居る。故に社会の幸福を謀る為に政府の干渉も必要であると申して居る。又研究法から申せば旧派は重に演繹法、新派は帰納法を用ゐて居る」<sup>15)</sup>。

ここで桜田は、経済学と理財学との用語法について簡略ながら述べているのが興味深い。すなわち、「日本で経済学と云ひ理財学と云ふものは英語の「ポリチカル・エコノミー」であるが、……若し「ポリチカル・エコノミー」を富の学問なりと解釈すれば日本語では理財学と云つた方が至当と思ふ。併ながら欧羅巴の社会党学派の如く人と富とに関する学問とすれば理財学は至当でない。理財学よりは経済学と云つた方が至当であらうと考へる」。桜田によれば、人と富との関係を論じ、人間社会の幸福を謀るためには政府の干渉も必要であるとする学問こそが「経済学」の名にふさわしい、というのであろう<sup>16)</sup>。そして、このように経済学の課題を理解するならば「先づ第一に人間社会の組織を知らざるべからず。而して人間社会の変遷及び盛衰を研究するの必要がある。それ故に新派の経済学者は歴史地理統計学に非常に重を置く」のである、と説く。「人を主とする」新派の経済学＝講壇社会党主義の経済学は、生産を論ずるについても「物のみを論ぜず人のことも深く研究する」。その例として桜田は宗教、法律、政治そして風俗等のあり方と「富の生産」や「国の進歩」との関わりの深さを述べている。そして、「兎に角新派経済学は人を主として論ずるから総ての事柄に於て人間社会の事情を詳に研究するであらうと思はれる」と述べて、話を結んだ<sup>17)</sup>。桜田助作のこの日の演説は、経済学協会例会において歴史派経済学の方法を主題として語られた初めてのものであった。その内容

15) 桜田助作「講壇社会党主義の経済学」『東京経済雑誌』第810号（1896年2月1日）所収、145～146頁。

16) 同上、146頁。

17) 同上、146～149頁。



は概略にとどまっております、また正確さに欠ける点も見られるが、しかしともかくも、経済学研究の新しい潮流への関心が経済学協会メンバーの間で共通の事柄となり始めていたことは、この演説からうかがい知ることができるのである。

翌96年2月15日の例会は、「箕浦勝人、阪谷芳郎、佐藤里治、田口卯吉、小手川豊次郎、松本君平、植村俊平、鈴木良輔、桜田助作等の諸氏廿余名」が出席して開かれ、松本君平の演説は「頗る耳新らしくて面白かりき」と記録されている<sup>18)</sup>。松本は次のように話を始めた。

「私の御話を致さうと存じます最新経済学派と云ふのは……「オーストリヤン・スクール」と申しまして重に近頃墺地利に始めて起つたメンジヤ、ウイザー、ボンバークの三博士の所説に係るものでございまして、此学派は従来の英吉利学派即ち「ヤーソドックス」或は「クラシカル・スクール」と申します経済学派とも其性質を異にして居ります。又彼の「ヒストリカル・スクール」歴史派即ち独逸学派とも其性質を異にして居りまして、最も斬新なる経済学派でござります。此学派は欧羅巴に於ては重に墺地利に於て流行つて居りまして、又伊太利にもさかん熾に其学説が行れかゝつて居ります。和蘭にも其勢力を及ぼし、既に英吉利にも多く其学説を奉ずる者あり、亜米利加に於ては殊に此学説が勢力を占めて居る有様である。日本は如何でござりますか。私は近頃帰朝いたしましたから存じませぬが、どうも大学の先生方に於ても此学派を代表する人が無い様でござります」<sup>19)</sup>。

松本は「墺国経済学派」の説明に入る前に、まず経済学説史に関するひと通りの知識を与えている。そこで松本は「一般に経済学説と云ふものは古来反動の力に依つて其説を変へて来たものである」と指摘して、古代中国、インド、ギリシアにおける「社会を統治するため」の「政治的経済説」に始まり、中世の「勤労は賞すべきものである」とする思想に基づく「基督教経済学」を経て

18) 『東京経済雑誌』第813号 (1896年2月22日) 295頁。

19) 松本君平「最新経済学派に就て」『東京経済雑誌』第815号 (1896年3月7日) 所収、365～366頁。  
なお、松本君平はアメリカ・フィラデルフィア大学の balan の下でオーストリア派の経済学説を学んだと自ら述べており、この日の演説は彼が帰国したばかりの時のものであった。同上、370頁。

「十六世紀の始に於て真正の経済学の芽」が出たと説いている。その近世に始まる「真正の経済学」を見ると、第1期の「英国経済学派は重に生産を主として論じ」、第2期の「独逸の経済学派は重に分配のことを論じ」そして「遂に第三の奥国経済学派は消費の点より経済的問題を観察する様にな」った、と説明する<sup>20)</sup>。「生産」から「分配」へ、そして「消費」へという図式でもって、学説の主軸の移動という観点から経済学説の歴史的変遷が手ぎわよく整理されている。

次いで「奥国経済学派の主張する所」の説明となるが、その理解と説明には松本の苦心が見られる。松本はその「主張」を3点にまとめている。すなわち、第1に「奥国経済学派の主張する所と云ふものは絶対的に英吉利経済学派に反対するものではなくて、英吉利の正統学派の説く所に誤謬のあることを認めまして、夫を糾するものである」。つまりドイツの歴史派は、イギリス古典派の方法すなわち演繹法を非難するが、オーストリア派はその必要を認める。第2に「奥国経済学者の特色として主張する所のものにして「マージナル・ユウチリチー」、日本ではどう訳しますか甚だ困難でありまして、ちよつと正当の訳字は無からうと存じますが……兎に角此「マージナル・ユウチリチー」と云ふことには奥国の経済学者は重きを置きしものでござりまして、是が即ち「バリユウ」価格に関する理論でございまして、奥国学派の説に依ると価格の問題は経済学上の神髓であつて、恰も重力の問題が機械学に於ける如く、凡て価格は経済学上の問題の基礎となるべきものであると云ふことを論ずるのでござります。即ち此価格のことに付ては従来英国学派及独逸学派の説く所の理論は間違つて居る、其誤謬を奥国学派が訂正せむとしつゝあるので」ある。第3に「「コンプリメンタリー・グーズ」の理論で、是は何と訳して宜しいか知りませぬが、其意味は種々の貨物が相調合して相集つて始めて此の物の真正なる「ユウチリチイ」を造る」という理論である。「土地、資本、労力は物品を生産する要素である。斯くして生産されたる物品は如何に正当に此の生産要素に対して分配

20) 同上、366～370頁。

せらるゝや、即ち正当なる報酬を決する問題は、今までの経済学者は深く注意しなかつたが、奥国の経済学派は此主義を以て理論として正当の解釈を下して、どう云ふ風に生産が起つて、どう云ふ風に分配して、どう云ふ風に消費すると云ふことを解説することが出来ますが、英吉利の正統学派も独逸の歴史派も此問題に対して正当の解説を下すことは出来ぬのである」<sup>21)</sup>。このように松本はオーストリア派の用いる諸概念について、適当な訳語が見出せないことに苦労しながら、出来るだけ単純な具体的表現でもって説明しようと努めている。そして「要するに此最新経済学派の説を解剖して見ると、従来の英吉利、独逸の学派より学理的組織が十分でありまして、正統学派よりも歴史派より〔も〕其観察する点と云ふものは頗る宏大のも〔の〕」でございまして、此奥国学派は経済学上第三期に発達したるものでござりまして、十年このかたのもので最も新しいものでござりますから、将来必ず此学派は世界に弘まるものであらうと存じます」<sup>22)</sup>と述べて、松本はこの日の演説を終えた。

1895(明治28)年から96年にかけて桜田助作と松本君平とによって、ドイツ歴史派の経済学説＝「講壇社会党主義の経済学」とオーストリア派の経済学説とがそれぞれ紹介され、経済学協会のメンバーの間においても、新しい経済学説への関心は確実に高まっていったと見てよいであろう。93年の暮れに「経済学の定義」と題して演説した田口卯吉は、この演説によって自らの経済学研究の方法的立場を明確に示し、それはゆるぎないものであったにちがいないが、しかしその田口にしても新しい経済学説に対して無関心であったわけではない。田口はとりわけ歴史派の主張を理解することに相当の努力をはらっていたのである。そして、ようやく1899(明治32)年5月20日の例会において、田口は「ロツシエル氏商工経済論を読む」と題して、歴史派経済学批判の演説を行なうに至った。これは田口にとって精一杯の歴史派理解であったと思われる。

『ロツシエル著商工経済論』は平田東助の邦訳によって1896(明治29)年に

21) 松本君平「最新経済学派に就て(続)」『東京経済雑誌』第816号(1896年3月14日)所収、413～416頁。

22) 同上、417頁。

版されたものである。この日の例会の記録には「田口卯吉氏はロツシエ〔ル〕氏の商工経済論を読むと題し、其の支離滅裂にして統一なきを攻撃したるに、瀧本誠一氏之を反駁し、田口氏又之を反駁する等頗る盛会なりき」と記されている<sup>23)</sup>。

この日田口は相当の準備をなしてこの演説にのぞんだものと見られる。

「満場の諸君。余の今日の演題は兼ねて通知致したる如く「ロツシエル氏商工経済論を読む」と申すことなり。余は経済学を以て一箇の科学則ち「サイエンス」となさんと欲するに切なり。故に経済と云へる文字の濫用せらるゝことを好まざるなり。然るに今ロツシエル氏の経済論を読むに至りて、其濫用の極めて大なることを思ふ。故に余は茲に卑見を陳して諸君の教を乞はざるを得ず」<sup>24)</sup>。

田口はまず、ここでの議論の前提として自らの説く経済学の定義を再度明確にさせている。すなわち「此宇宙則ち吾人の五官の達する境界に於ては、一箇の法則の行はるゝありて、秩然として乱れざるなり。此法則の中吾人の既に発見せしものあり、吾人の未だ発見せざるものあり、其性質の相同じきものを集めて一となすもの、是れ則ち科学なり。……余は経済学も亦一箇の科学たることを信ずるものなり。宇宙間に於て経済学を構成すべき一種の現象あることを信ずるものなり」。そして、その経済学をアダム・スミス流に「富の科学」とするにしてもあるいはまたマクロード流に「価格の学」とするにしても「要するに斯く種々の意見ありと雖も、其所見は経済帝国の範囲の広狭に異議あることにて、大体に於ては経済帝国を認めたるものなり」<sup>25)</sup>と。つまり田口は、経済学は人間社会の経済活動に発見される法則性を追究する一箇の科学である、というのである。その法則性をどこの範囲に発見するかは学者により異なるにせよ、法則性の追究という学問の課題は同一である、という。ところが、

23) 『東京経済雑誌』第980号（1899年5月27日）1094～1095頁。

24) 田口卯吉「ロツシエル氏商工経済論を読む」同上所収、1072頁。同演説筆記録は『東京経済雑誌』第980号から第987号に分載、『鼎軒田口卯吉全集』第3巻収録。

25) 同上、1072～1073頁。

「然るに今ロツシエル氏の商工経済論を読むに、恰も一箇の経世論とも称すべき意味にて、経済学の語を用ひたるが如し。……此著述は一種の経世論集とか若くは一種の商工百科全書とか申すべきものにして、則ち八百屋的に集めたるものにして、前後相承応すべき科学の著作にあらざることを認めたり。而して其各項を通読するに至りて余は其結論の誤謬を発見するに難ならざりき」<sup>26)</sup>。

田口の経済学の定義にしたがえば、ロツシャーのこの著作はおよそ経済学には含め得ぬものであり、そのみならずその立論自体にも誤謬が見出されると田口はいうのである。田口の演説は『商工経済論』を読み進めながら、その記述のところどころを取り上げて、それに対する自身の賛否の論評をはさむという形で進められていく。田口の批判は商業あるいは商業国の衰頹をめぐるロツシャーの議論のところ集中した。田口はいう。「氏は非常に唯物主義及拝金主義を嫌はるる人にして「最高の問題及利害に頓着せず」とまでに排斥せられたり。其最高の問題及利害とは如何なるものや明言せざれども……必ず国家の存亡に関する事を云ふなるべし。然れども余は未だ氏が引証したる簡單なる例証にては、何ゆゑに唯物主義及拝金主義が……国民をして滅亡せしめしやの理を解する能はざるなり」<sup>27)</sup>。そして、ロツシャーの「商業国の衰微を促がすこと最も顕著なるは人民が方正の風俗頹敗するよりも甚しきものなきなり」とする議論に対して、田口は、商業国の衰頹の原因は決して「人民方正の風俗の頹敗」にあるのではなく、主なる原因が「専ら政治」にあることは古代から中・近世に至るまでヨーロッパ諸国家・都市の歴史に照してみれば明らかであると反論する<sup>28)</sup>。そのことはロツシャー自身の「国民の独立を失へると同時に〔商業もまた〕衰頹したり」<sup>29)</sup>という叙述にも示されているというのである。田口

26) 同上, 1073頁。

27) 田口卯吉「ロツシエル氏の商工経済論を読む（前号の続き）」『東京経済雑誌』第982号（1899年6月10日）所収, 1178頁。

28) 同上, 1179頁。

29) 田口卯吉「ロツシエル氏の商工経済論を読む（前号の続き）」『東京経済雑誌』第983号（1899年6月17日）所収, 1235頁。

はロツシャーの著作を読み込み、そこから自説の論拠を引き出そうとする。そして田口は「氏が或ひは気力の萎微と云ひ、或ひは方正の風俗の頹敗と云ひ、或ひは精神の欠乏と云ひ、或ひは意想の卑賤に赴くと云ひて、之を以て商業衰微の源因を説明せんと欲したれども、余は商業は政治上の妨害なき以上は駸々として進歩して止まざるものたることを信ずるものなり」<sup>30)</sup>と結論する。

田口は歴史的研究の意義を軽視していたのでは決してない。社会の変遷の「理」を歴史過程の中に検証しようとすることは田口の——田口の定義によるところの「社会学」上の<sup>31)</sup>——大きな関心事であった。だからこそロツシャーの大著に興味を示し、かつそれを仔細に検討したのであろう。「ロツシエル氏は経済学に於て歴史的研究法を主張したる人なるを以て、余は氏が歴史を研究して推断する所果して如何なるものなるやを査察したるに、古来商業国の興廃存亡の源因を断ずるの妄なること以上の如し。余豈に失望せざるを得んや」<sup>32)</sup>。田口はこの演説筆記録を中断するかたちでもって終結させ、その末尾に次のように記した。「抑も商業史は最とも緊要なるものなるを以て、余は先きにロツシエル氏の観察の誤謬を正したりと雖も尚ほ足らざるを思ふ。故に茲に商業史歌を作り其真事実を証明し、然る後ロツシエル氏の他の論点に及ばんと欲するなり」<sup>33)</sup>。1899年7月から10月にかけて『東京経済雑誌』に15回にわたって掲載されたあの長大な『商業史歌』は、ロツシャーの著作を読んだことをきっかけとして田口自身の開化史としての「商業史」を著わすためにつくられたのであった。田口の演説の後、田口のロツシャー理解に対する瀧本誠一による反論、さらにそれを受けての田口の再論が行なわれたと例会記録にはあるけれども、そのやりとりの内容については、残念ながら全く記録に残されていない。また

30) 田口卯吉「ロツシエル氏商工経済論を読む（承前）」『東京経済雑誌』第985号（1899年7月1日）所収、12頁。

31) 田口は「社会学」を「開化史上に顕はるゝ事件を支配する理を説くもの」であり、また別言して「数千年に渉りて社会の盛衰興廃する所以の理を説く」ものであると定義している。「社会学は社会を縦に見たるものなり、経済学は社会を横に見たるものなり」。田口卯吉、前掲「経済学の釈義に関して駁論諸子に答ふ」『鼎軒田口卯吉全集』第3巻所収、229頁。

32) 田口卯吉、前掲「ロツシエル氏商工経済論を読む（承前）」『東京経済雑誌』第985号、12頁。

33) 田口卯吉（表題なし）『東京経済雑誌』第987号（1899年7月15日）所収、123頁。

その後、田口が「ロツシエル氏の他の論点」に言及した事実は見出せない。

## Ⅱ 歴史・理論・政策——田口・瀧本論争(1)——

田口卯吉が「ロツシエル氏商工経済論を読む」の演説を行なってからちょうど2年後、この田口のロツシャー批判に対して反論した瀧本誠一が、今後は、経済学協会の例会の席で「経済学研究の方法」と題して演説を行なうことになった。それは1901(明治34)年5月の例会(日にち不詳)においてである。この日瀧本が話をするようになったのは、ちょうどその頃瀧本は『経済的帝国論』という著作を公刊したが、その中に入ることになっていた「経済学の定義」なる一章が出版上の都合によりはぶかれたため、そのことを前回(4月)の例会で瀧本が田口に話したところ、「それは爰で演説したらどうだといふこと」になった、という経緯によるものであった。けれどもその「経済学の定義」の一章はその後別の雑誌に掲載されることとなったため、この日の瀧本の演説の内容は「経済学の研究の仕方に付ての歴史上の話」ということに改められた<sup>34)</sup>。

そこでまず瀧本は次のようにいう。

「[学説は] 総て経済学の学説に限らず如何なる学説であつても其時の時勢の変遷といつても符合して居るもので、是までどういふ学説であつても、一つの学説が出るといふことは、全く社会の大勢に関係なく、独立に学説の起つて来るといふのは、殆ど歴史上認め得られぬことであらうと考へます」<sup>35)</sup>。

このように述べた上で瀧本はイギリス古典派の経済学説がもつ特徴を次のように説明する。第1に、アダム・スミスの「富国論が世に公にされた時代を考へて視なければならぬ。其時代は……世の中の有様が殆ど皆リバーチャー(自由)といふことで支配されて居つて、総ての事にリベラリズムといふ觀念が浸み込んで居つた」。「其時の人民は自由を求めるといふことが最上唯一の目的であり

34) 瀧本誠一「経済学研究の方法」『東京経済雑誌』第1084号(1901年6月8日)所収、1196～1197頁。

35) 同上、1197頁。

随て其時の学問殊に政治、法律、経済なんといふやうな實際的の学問には悉く自由の痕跡を印せざるなしと云ふの有様」であつた。とはいえ、その『国富論』の叙述をしてみるならば、「当時各国の實際の有様、殊に仏蘭西のインダストリーの模様などは最も綿密にして、其の材料は頗ぶる豊富であ」つて、「或る論者、殊に独逸あたりのヒストリカル・スクールの者でもアダム・スミスの説は余程立派なもので、又英吉利あたりの経済学者でもクリツフ・レスリーなどはアダム・スミスが今日まで居たならば、必ず国家社会主義を取る一人であつたであらうといふことを言ふて居る」くらいである。ところが第2に、「アダム・スミスに続いて出て来りたるリカード、及ゼームス・ミル、マカロツク等は肝心のアダム・スミスの極く善い所を棄て、仕舞つて、却て欠点と言はるゝ所のアブストラクトの説を採用し祖述するやうなことになるつて、結局経済学といふものを其の元祖とも称せらるゝアダム・スミスの本意に背きて、全く殺して仕舞つた」のである。リカードウにあつては「アダム・スミスが富国論に於てインダクション（帰納法）とデダクション（演繹法）と両方の論法を用て居るに拘はらず純然たるデダクティブの論法を極端に使用し、一己の頭で理想を画き出して、<sup>あたか</sup>恰もアクチュアル・ソサイティーには関係のないことを想像し、全く之を土台となして理窟を立てた」のである。すなわち「単にセルフ・インテレストのみで支配された……エコノミツク・メン」を土台として経済上の原則なり法則を設定することになった。その結果、「学者達は已むを得ずセテリス・パリプス即ち他の事が同一にあればといふ言を用い、又はジスターピンク・カウズ斯の妨げる原因が無かつた時にはと云ふ申訳的の言語を挿入して所謂原則を主張」せざるを得ないのである。第3に、結局「他の事が同一であるならば、妨げる原因がなかりせば、此通りになるべしと云ふ原則を設定した所が肝心なる周囲の事情は概ね同一で妨げる原因が大なる部分を占めて居るから経済上の原則の働く範囲は丸でゼロとなり、之を土台として打立てた意見は大方ノンセンスで了つて仕舞ふのである」。つまり、瀧本誠一の主張によれば、経済学はリカードウ以下の正統派によって「斯くの如き死物扱にさるゝ」に至つたのである。その由つて来るところは「ナチュラル・リバーチー」なる時勢の精神



と「エコノミック・メン」を土台とした「極端のデダクティブ・メソッド」を採用した立論とにあった<sup>36)</sup>。

そして、アダム・スミスが「あらゆる特権、あらゆるモノポリーを打破するの利器として」主張した自由主義は、その後最近50年この方に至って「却て特権を作る道具になって来た」のであり、また他方、世界の「到る処の社会の有様を見、種々異った習慣、風俗を見るに従って」「世界開化の種々の段階に居る所の国民の有様を詳しく詮議するやうに」なってきた。歴史派の経済学が登場した時代状況を瀧本はこうに理解し、その歴史派による正統派に対する批判点を次のように説明する。すなわち、歴史派にあっては「勢ひアブストラクトのエコノミック・メンといふやうな現実社会の人間に異りたるものを想像して論ずるやうなことは断然排して其の根本を打破つて仕舞つた。其打破つたのは何かといふと、前に申した他の事が同一であればといひ、妨げる原因がなかったならばといふ申訳的の弱点を破つて、他の事は同一でない、妨げるものは沢山ある、さういふものが大なる部分を占めて居るといふことを言ひ出し」たのであった<sup>37)</sup>。この歴史派に対する反動として台頭してきたのがオーストリア派であり、この派は「ヒストリカル・スクールの者は旧派経済学を粉微塵に打破つたばかりで、己等は曾て自ら一の学説を組立つたことがない」と歴史派を批判するのであるが、しかし瀧本が見るところ、「其の跡に代るべき真の学問を建造すると云ふ目的はオーストリアン・スクールの働きに拠つて達せらるゝや否やといふことになりますと、私共の考ではそれはどうしても出来ぬことと思ひます」と、オーストリア派の可能性には否定的な評価が下される。なぜならば、オーストリア派は「ポリチカル・エコノミー」ではなく「ピユーア・エコノミクス」を標榜するが、しかしながら「今日経済学上一番困難の問題は、今日の様な複雑なる社会に於きますとピユーア・エコノミクスばかりで解釈する事が出来ぬのみか学問上の問題と致しましても重なる事柄は大概皆応用経済学の方で解釈せねばならぬ様にな」っているからだ、というのである<sup>38)</sup>。

36) 同上、1197～1200頁。

37) 同上、1200～1201頁。

38) 同上、1201～1202頁。

瀧本誠一の経済学観はこの日の演説の末尾のところで明瞭に示されている。瀧本は歴史派の経済学への共感を込めて次のように述べた。

「私共の考には、否私共ではない、ヒストリカルと申す広き一派の学者等は経済学を一ツのソシアル・フ#ロソフ#—と見て、一つの完備したる大きな学問を組立てやうといふ大目的を有することでありまして、之をやるにはどうしても今後大に活眼を開きて活社会のあらゆる現象を研究しなければ其の大目的を達することの出来ないものであらうと考へます。現にアダム・スミスの富国論に書いてある所を見ると此の人の目的は実は矢張り経済学をソシアル・フ#ロソフ#—の一部分となして範囲の広き大学問とするの考であつた様に思ひます。〔一〕昨年此処で田口先生がロツシヤの経済学を批評されまして、アレは経済学ではない、正当の範囲を脱したことが書いてある、都府市邑などの興亡を論じて居るのは経済学以外であるといふことを言はれましたが、アダム・スミスは其の実ロツシヤなど、大に違つたことはない。富国論を読んで見ると一つの大々の政論といつても宜い位である。アダム・スミスの頭に描き居たるポリチカル・エコノミーといふものは必ず一のソシアル・フ#ロソフ#—に相違なかつたと思はれます」<sup>39)</sup>。

そしてその証拠にと、瀧本はスミスの『モラル・センチメント』や、さらに『生前グラスゴーでやつた講義録』を紹介して、「アダム・スミスの経済的眼界の広大なりしことは歴々と明かである」と主張したのである<sup>40)</sup>。

瀧本の演説が終わるや、田口卯吉が立って瀧本の主張に対する論評を加えた。田口は、今回の例会において自説を述べるとことわった上で、「科学」の論法という点に限って次のように意見を述べている。「瀧本君はいろいろな本を御読みなすつて居らるゝことは私<sup>はやく</sup>疾に承知して居りますが、唯今承つた所では御読みなすつた御本は必ず英<sup>イングリツシユ・スクール</sup>国<sup>スクール</sup>学<sup>スクール</sup>派の悪口を言つた本を沢山読まれたものと見える。経済学の真理を説かれるより、悪口を言はれた方が多かつたやうに思ひます。其中に「抽象的<sup>アブストラクト</sup>」とか、「純粹的<sup>ピュア</sup>」とか「他は一樣であるとして<sup>セテリス・フアール</sup>」

39) 40) 同上、1203頁。

とか「<sup>ア・プライオリ</sup>演繹的」といふやうな言葉を悪口的に加へられてあります」。しかし、と田口は続ける。「是は経済学一つの罪でない。総ての<sup>サイエンス</sup>科学がさうである」。第1に「他の物は一様にて」という言葉は「<sup>セオリー</sup>学説」を立てる時に必要なものである。例えば物理学において「投げた石は極真直に何処までも行」くというのが「<sup>セオリー</sup>イ子ルシヤ随力の学説」であるが、これは「他の物は一様にて」の条件が付いた上での説明である。実際には引力によって投げられた石は落ちて来るのであり、また空気や風の具合によって昨日投げた石と今日投げた石が同様に落ちるというわけにもいかないのである。だからといってかかる「学説」を立てることが無益だということにはならないのであって、「人知に有益」である。「之とく経済上に於て「需用が多ければ物の価が上がる」といふ原則がある、是れもセパレース・パイズ則ち「他の物は一様にて」の条件付」なのである。第2に「演繹的であるから誤謬である、帰納であるから正当であると云ふ相違はない」。「学説」とは「他の物は一様にて」の条件のもとに「<sup>ゼネラル・ロー</sup>一般普及の法則を見出して、さうして斯ういふものだとちやんと断定する」ものである。したがって「私は学説を立つる上に於て<sup>デダクティブ</sup>演繹とか<sup>インダクティブ</sup>帰納とかいふことは無いと考へる」<sup>41)</sup>と。

田口のここでの論評は、瀧本が経済学をひとつの「ソシアル・フ井ロソフ井一」だと述べて演説を結んだことに対して、経済学はあくまでも「科学」=法則科学であるとする立場から、「科学」が語りうる範囲とその論法を強く主張したものであった。

翌6月の例会(日にち不詳)で田口は「<sup>メンタルサイエンス</sup>経済学は心理的科学なり」と題して演説した。その冒頭で田口は、前回の瀧本の演説を受けて、「瀧本君は私を大に攻撃した積りであつたらうと思ふ、で……今日は全体に付て御答へ申す積りです」と述べ、加えて「併し此事を十分に御答へするといふには殆ど一個の著述になる。随分大きな本を著述しても、なかなかそれで十分に意見を書き盡し

41) 田口卯吉「瀧本君の演説に対して」『東京経済雑誌』第1085号(1901年6月15日)所収、1245～1247頁、『鼎軒田口卯吉全集』第3巻収録。

たといふ訳にはいかない位である。其故に私は其要領だけを今夕申上げる積りでござります」と述べている<sup>42)</sup>。経済学とは如何なる学問であるかというテーマを論ずることに田口は実に生き生きと取り組んでおり、このテーマに対する田口の変わらぬ意欲がうかがわれる。瀧本の演説は、まさに、田口が自らの経済学観を明確化させる上でかっこうの呼び水となった。この日の田口の演説は全体で8つの項目によって構成された理路整然たるものであった。

田口は、まず第1に「ヒストリカル・メソッド歴史的方法」と「ロジカル・メソッド論理的方法」を瀧本は「研究方法」として二分してとらえるから、そこに誤解が生じるのだという。すなわち「抑も自然の理法が未だ発見せられずして、総ての学説が未定であつて、<sup>まさ</sup>方に研究しつゝある間の有様を言ふ時には、それは則ちヒストリカル・メソッド……が一番宜い」のであり、「既に或る理法を発明し、原則を確定して、之を一箇の学問として人に教ふる時に」は「ロジカル・メソッド……を以て結論をして仕舞つて、世の中に向いて「需要供給の理は斯ういふものである」といふ様な道理を説く」のである。実際「今までのイギリス学派が歴史的研究を怠つたかといふと、イギリスの学派は決して怠つては居らぬ。歴史的事実でも統計的事実でも何んでも攻究しつゝある。併し経済学の原則を人に説きます時分には歴史的事実は用ひない。歴史的事実を用ふる必要がない。ロジカル・メソッド論理的方法のみで十分である」<sup>43)</sup>。つまり、田口にいわせれば「一箇の学問」＝「科学」としての経済学はロジカル・メソッド（論理的方法）であるしかない、ということになる。第2に、瀧本は「アダム・スミスは其の時世論に先づカブレて、自由貿易を説いた」のだと主張する。確かに「アダム・スミスの議論と雖も自ら時世に従つて出たに違ひない」のだが、しかし「自由貿易の自由といふのは、世の中の<sup>はや</sup>流行り物などといふものゝ意味とは大層違ふ。……兎に角自由貿易の自由と、民権の自由とはマルで性質が違つてアダム・スミスが民権自由の説にカブレて自由

42) 田口卯吉「経済学は心理的科学なり」『東京経済雑誌』第1088号（1901年7月6日）所収、9頁、『鼎軒田口卯吉全集』第3巻収録。

43) 同上、9～10頁。

貿易を説いたと云ふのは酷評である」<sup>44)</sup>。第3に、それではアダム・スミスが自由貿易説を立てた所以はどこにあるのか。アダム・スミスは当時各国の間で行なわれていた商業上への政策的干渉すなわち「富といふものは金銀より外ない。金銀に富といふものが存在してあるのだから、輸出を多く勤めて輸入を減らして其間のバランス・オブ・トレード貿易の差額を外国から金で持つて来やう」という国家の政策に反対して自由貿易を説いた。そこで「国の富の性質及び原因」について研究するにあたってスミスは分業、交易、資本、賃銀、地代といった「今日我々が経済上で謂ふ所の、種々の事項を能く調べて、それを根拠にして富といふものは総て人間の需要を満足するものである、決して金銀だけでないといふことを明かにして、外国から金を取らうといふ考は間違つて居るぞ、国を富ます方法でないぞといふ論拠を立つたのである」。田口は『国富論』におけるスミスの立論をこう理解し、そして次のようにいう。「アダム・スミスの国富論ウエルス・オブ・子ーションといふものは、今日我々が謂ふ経済学でない。当時の時勢論である。我々が経済雑誌で毎日書いて居るやうな時勢論である。けれども其時勢論の根拠になつて居る所の資本なり利息なり価値なり地代なりといふものは、即ち経済学の基礎になるもの」である、と。田口の主張は、アダム・スミスは「経済学の基礎」をうち立て、それを論拠にして自由貿易を説いたのだから、それは「天賦の自由などと云ふものとは関係ない」、というのである<sup>45)</sup>。

第4に、瀧本は「エコノミツク・ロー経済の理法といふことを批難せられた」。すなわち、瀧本は「他の物が一様ならば」という条件を付して議論することは「其他の物といふ方が実に多数で、世の中の種々の状勢を支配して居る」のだから無意味だというのであるが、「併し是は乱暴狼籍な意見」である。試みにロッシャーの議論を見るならば「周囲の事情が変化されずあるならば」といつているのではないかと田口は指摘する。「経済学は原則を定めて行くのでございますから、此原則を定めるといふことは無駄とすれば、第一に経済学といふもの

44) 同上、10頁。

45) 同上、10-12頁。

はマルで無くなつて仕舞ふのである」<sup>46)</sup>。第5に、そのエコノミック・ローは「人間の性質の変らぬ中は始終一ツである。……則ち人間社会に自然に在るロー理」なのである。この「自然の理」を発見し、それを論拠にして「金銀を富だと思つて居つた」俗論を排斥したのがアダム・スミスであつた。だからアダム・スミスは経済学の鼻祖なのである、と田口は主張する。そして「此ローを発明したのを時勢論としてはいかぬ。引力の発明と同一である。真理に流行り廃りはない」<sup>47)</sup>と。第6に、エコノミック・メンを瀧本は「想像的の人間」という。これに対して田口は「利己心と云ふと宗教家や道德家や若くは瀧本君の如き御方にはイヤに感ぜらるゝか知らぬが、餓えて食を求め、渴して飲を求むといふ考のある人を利己心ある人、即ち需要を持つて居る人、それが則ちエコノミック・メンである」と説明する。経済学は「利己心の現はれて居る点で人間を見たものである。是は全く想像的ばかりのものといふことは出来ない」<sup>48)</sup>。

第7に、田口は経済学に対する国家主義者の誤解を解く。アダム・スミスは「国民の富を研究し、国を富ますには自由貿易をするのが良策なるぞと云ひて国家的に議論を書いた」。重要なことはスミスがその研究の結果「経済の理を発見し其の原則<sup>アキシオム</sup>を定め」たということにある。それによって「経済学に於て研究する所の問題は国家との関係を離れて箇人的のものとなりました。箇人的と申すと大層小くなつた様に思はれますが、之と同時に世界的になりました。詰り人間社会的のものとなりました」。フリードリヒ・リストが「ナショナル・システム」を論じたのは「是は宜いのです。……併ながら是と同時に矢張り国といふものに何にか夫々ツツ違ひて居る事情がある様に思つて、ゼルマン一國で一ツの経済論が立つ如く思ふのが間違ひです」。つまり田口は「経済の理」は「人間社会」に共通なのであるから、国ごとに何か「特別な経済学を拵へやう」と考えることは無意味だというのである。加えてロッシヤーになると「商

46) 同上、12～13頁。

47) 同上、13～14頁。

48) 同上、14～15頁。

人の経済論だの、農民の経済論だの、工業の経済論だのといふ、一々に経済書を拵へやうとした」。しかし田口は次のように断言する。「アツプライド・エコノミー応用経済学なんといふ名を付けた所が、其程度は分り切つて居る。必ず実際には遠いのである。故に唯のエコノミー経済学といふものは唯原則を極めて行けば宜いのである。原則を一々陳列して置けば宜いのである。経済学は藥種屋である。之を応用する経済学者は藥劑を応用する医者と同一である」。つまり田口にいわせれば、現実の経済上の現象は数限りなく様々なのであるから、そのすべてを網羅することはとうてい不可能であり「必ず実際には遠いのである」。応用経済学者のしようとしていることは、医学の知識を診療に應用する医療現場における医者と同様に、経済諸活動の現場にいる企業者・政策者等々の仕事なのだ。「エコノミー経済学を学べば、経済界の原因を見極める脳力<sup>(マツ)</sup>が出来るのである。ですから経済書は仮令今日の事情に的中しなくとも、一々其論じて居る所を調べれば今日の事情を説明かす知識を増させる益があるのである。応用経済学など云ふものは無益なものである」<sup>49)</sup>。田口は国民ひとりひとりが経済学の知識＝「経済の理」を理解し身につけることを強く期待していたから、その知識を應用し実社会にあてはめて活用するのは決して学者ではなく国民ひとりひとりだ、ということになるのである。

最後に第8に、田口は正統派＝古典派経済学の「欠点」を述べる。すなわち「学問は一種の性質で押し通さねばならぬものであり、又取除を免さぬものであります」(傍点原文)。ところが正統派の経済学説は「一種の性質を以て押し通さない」。いくつものエコノミック・ローを認めはするが「十分に之を網羅して巧に順序を立て、行く」ことに成功していない、と田口は見る。これに比して「アウストリヤ派の説いて居るのは余程見識の新なる所がある」。オーストリア派の説く「ワリユー価値の学問」を一種の性質で押し通すという観点からさらに研究してゆけば、「一番能く総てのエコノミック・ローを網羅するやうな解釈を得ると思ふ」。そして、つまるところ田口の主張は、「需要供給の道理

49) 同上、15～17頁。

の行はれて居る所が経済学の領分である。即ち需要供給の行はれた結果ワリユー価といふものが出る」のであり、それは「買手の利己心」＝メンタルと「売手の利己心」＝メンタルとが「衝突して其間に相場が成立つ」ということであるから、結局「エコノミーが総てメンタル・サイエンス心理的科学といふことで独立が出来る」というのであった<sup>50)</sup>。田口のこの点の主張はすでに7年前の例会の席で行なった「経済学の定義」の演説で示された見解を再度論じたものであると見ることができる。

### Ⅲ ナショナル・エコノミーと「経済の理法」——田口・瀧本論争(2)——

1901（明治34）年5月例会において瀧本誠一が経済学の方法をめぐって演説し、翌6月例会で田口卯吉が瀧本の主張を批判する演説を行なった後、7月例会ではこれらに関連する話題はなく、翌月は暑中休会となった<sup>51)</sup>。そして9月例会（日にち不詳）で瀧本誠一は「田口博士の駁論に答ふ」と題して再び演説に立ち、田口の批判に答えることとなった。瀧本に対して田口が答弁を督促したようである。この日、瀧本は演説の前置きとして、田口の『日本開化小史』『支那開化小史』『日本開化之性質』『日本之意匠及情交』といった著作を挙げ、田口はドイツのシュモラーやイギリスのカニンガムなどと「殆ど違はぬ位の経済学者」である、つまり歴史派の経済学者であると述べ、しかし同時にまたマンチェスター派の「極生粋の標本」であるような経済学者でもあると評して、田口のなかには「全く水火相容れぬ所の二つの御意見があらうと私は考へる」と述べている。瀧本は田口に見られるこの2つの方法の關係如何を問うことはせず、「マンチェスター・スクールの田口博士に御答申上げます」とし

50) 同上、17～19頁。

51) この間、田口の瀧本を批判した演説筆記録が『東京経済雑誌』に掲載されると、その翌号の誌上には田口の主張に含まれた曖昧な点を指摘した読者（津久井誠一郎）の寄稿が載せられた。田口はこの寄稿に答える論稿を書いて、先の演説での自説を補強している。田口卯吉「経済学の釈義に関して津久井君に答ふ」（1901年8月3日）、同「経済学の釈義に関して再び津久井君に答ふ」（1901年9月28日）、いずれも『鼎軒田口卯吉全集』第3巻収録。



て本題に入った<sup>52)</sup>。瀧本は先に田口の行なった批判の順序にしたがって話を進めた。

第1に、田口がいうところによると「経済学には自然の理法即ちナチュラル・ローと申すべきものありて是れは既にハツキリ確定して居るから、最早今日争ふまでもないといふことらしく思はれ」るが、しかしこれは「博士の誤の根本」である。すなわち「田口博士の想像される所の経済学の法は、即ち天文学、化学或は数学の法など、同一の意味にして所謂自然法を述べらるゝやうなれども、経済学者が時々用ふる所の法（エコノミック・ロー）なる語は夫の有形学の法とは全く違つたものにて、……田口博士が違つた性質のものをマルで同じ物として、一緒に混じて居られること、考へます」。田口は自然法を「モウ備つて分り切つて居る」ものとして、その存在を信じ、エコノミック・ローをかける意味での自然法とみなしている。しかしながら過去の経済学者の著作を調べてみればエコノミック・ローを唱えているものは極くまれであると瀧本はいう。瀧本はマクロード、ミル、ケアンズ、バジョット、歴史派のクニース、レズリー、カンニンガム等々の所説を示し、さらに「アダム・スミスの著作にすらエコノミック・ローといふことは決して書いてありません」と指摘する。そしてローという表現はリカードの著書に見られるくらいのものである、と。「今日エコノミック・ローが確定して居るとか、モウ此上研究する必要はない、研究の時代は一步進んで仕舞つたといふ御言葉は元來此の法と云ふ字を混同された誤解から起つた御説にて飛んでもない僭越の妄断と私は申します」<sup>53)</sup>。

第2に、田口は瀧本が学説は時代の産物だと述べたことに反発し、「天賦の自由」と「自由貿易の自由」とでは「自由」の性質が全く違うのだと主張したが、しかしこれを瀧本は「請取れぬ御話」とつき返す。なぜならば、アダム・スミスの自由貿易説はフィジオクラートのレッセ・フェール（自由放任主義）の思想から起つたものであり、そのレッセ・フェールは政治上の「ナチュラル・

52) 瀧本誠一「田口博士の駁論に答ふ」『東京経済雑誌』第1102号（1901年10月12日）725～726頁。

53) 同上、726～728頁。

リバーチー」の主張を引くものだからだ、と瀧本は説明する。要するに「彼の自由貿易と政治上の自由主義とは、全く其性質が同じもので一の根元から起って居るものと見て差支ありません」<sup>54)</sup>。第3に、田口が「富国論の中にある価とか資本とか賃銀とか種々の問題が経済学を起す根拠になったけれども、元来此の書は経済学」ではなく「時勢論」だというのであれば、それでは「経済学とはドンなものか」を田口に尋ねたいと瀧本はいう。「田口博士の意はアダム・スミスの著書中ヒストリーに関する事実が沢山書いてあるが、アレは経済学に必要な無いものである……といふ御話であらうかと存じますけれども、此点はモウ一応明かに承はらなければなりません」<sup>55)</sup>。第4に、「セテリス・パリブス」＝「他の物が一樣ならば」という条件を付した議論では「肝心必要の問題は皆此の便利なる一語の中に於て曖昧に付し去り、却て経済学者が研究を要する事実上の事は総て之を度外に置きて顧みない」ことになると述べた瀧本の主張に対して、田口はロッシェの著作中にも同様の論法があることを指摘して反論しようとしているが、瀧本がいうにはロッシェの議論は「ヒストリカル・メソッドに適つて居らない」のであり、その「多くはクラシツクの陳説を踏襲する者」であるから、ロッシェの著作を挙げても瀧本の主張への反論にはならない。ここで瀧本は歴史派の「学派中最も頭の良くして最も適當なる代表者」としてクニースを挙げている<sup>56)</sup>。第5に、「経済の理の普及の性質」すなわち「エコノミツク・ローは何処にも応用される、即ちコスモポリタンである」とする田口の主張は「妄断」であり、「一向取るに足らぬマクロード的の説である」<sup>57)</sup>。第6に、「エコノミツク・メン」についての瀧本の批判に対して、田口は「人間社会は競争で成立つて居る、故にエコノミツク経済学といふものは、利己心で成立つて居る」と述べているが、これは「飛んでもないお話」である。これは「私が此に弁明する必要もあるまい」。田口が20世紀初めの今日においてな

54) 同上、728頁。

55) 同上、728～729頁。

56) 同上、729頁。

57) 同上、729～730頁。

おこのようなことを述べているのを記憶しておきさえすれば足りる、と瀧本はねつける<sup>58)</sup>。

第7に、田口は「経済学に於て研究する所の問題は、国家との間を離れて箇人的のものとなり」「之と同時に世界的に」なつたと主張している。しかしながら、「世界的」となつたのはその通りだが「個人的」になつたというのは誤りである。「近年経済学に於て研究する所は個人的を離れて益々国家的になり」、さらに「国と国との団体の關係に」なっている、と瀧本はいう。また田口は「農だの商だの工だのといふことは、学者は認め得ない」というが、これは「私は未だ嘗て聞いたことのない暴言」である。田口は「応用経済学なんといふ名を付けた所が、其程度は分り切つて居る」といつているが、その田口が以前に経済政策について論じた著作——『続経済策』（1890年刊）のことか<sup>59)</sup>——を公刊していることを瀧本は取り上げて、「アノ中に書てあることは、私は至極御同意のことである。経済学は宛も支那人の謂ふ經世学で經国済民の学問であるといふことを仰ツしやツたやうに思ひます」と述べる<sup>60)</sup>。そして第8に、田口はオーストリア派の学説を称賛しているが、田口がいうような「此の学派の価値の説明は需要供給の行はれた結果ワリユーが生ずるなど云ふ漠然たる」ものではない。田口はイギリス＝マンチェスター派による価値の説明とオーストリア派によるそれとを混同しているのであって、両者の説明は「全く逆様」である。すなわち「所謂るヴァリユーは何から起ツて来るぞと云ふと、奥国派は未来のコンサンプション（消磨）から起ツて来ると云ひ、マンチェスター・スクールは過去の生産費から起ツて来ると云ふ。即ち此の点に於て奥国派は最も明確でありまして、田口博士が謂はるゝ如き不明瞭な論ではありません」。瀧本は

58) 同上、730頁。

59) 瀧本は次の第8の論点を論ずるなかで、ここでいう田口の経済政策の書物を明治17年5月出版のものと述べているのであるが、それに該当する著作は見当たらない。瀧本はこの議論で田口の論稿「学問の性質」を取り上げ、この論稿は上記の経済政策の書物に収められていると述べている。「学問の性質」が『東京経済雑誌』に掲載されたのが1884（明治17）年5月であるから、このことから判断すると、瀧本は「学問の性質」の初出年月とそれが収録された書物の刊行年月とを取り違えたものと思われる。その書物は『続経済策』であり、1890（明治23）年5月に刊行されている。

60) 瀧本誠一、前掲「田口博士の駁論に答ふ」『東京経済雑誌』第1102号、730～731頁。

田口のオーストリア派価値論理解の曖昧さをついている。これに加えて瀧本は、ケアンズが経済学を「物理的及心理的科学」だと説いたと田口が説明したことを取り上げて、ケアンズは決してそのようなことはしていないのであって「経済学は物理的の学問にも、心理的の学問にも、ドッチにも属せざる中間の地位を占むるもの」だといっていると指摘する。そして結局のところ田口は経済学は「メンタル・サイエンス心理的科学といふことで独立が出来る」と主張するが、これでは経済学は「取りも直さず心理学ではありませんか」と瀧本は述べ、「経済学と心理学とが深い密接の関係を有つて居るには相違ありませんが、其の関係より申せば法理学、政治学、社会学又は理化学等に対しても同様密着の関係を有して居ること、私は考へる」というのである<sup>61)</sup>。

瀧本はこの日の演説を結ぶにあたって次のように述べた。すなわち「経済学は時代に依り場所に依り国に依つて変化し発達して行くのであつて、即ち日本にはジャパニーズ・ポリチカル・エコノミーがあるべきであらうと思ふ。田口博士はリストのナショナル・エコノミーが痛くお嫌であつて（少なくとも学問として）学問に国境があるものか、学者の眼中には国家なしと云ふの御見識なれども、博士は今日現に政治家であり愛国家であるのみならず一方に於ては経済学は経国の学問なりといふことを随分仰せられて居る所があるやうに思ひあはすれば博士の真意は決して素町人的——店番頭的——否寧ろ亡国的の経済学を主張せらるゝのでなく、唯だ何となくナショナル・エコノミーといふ文字が御嫌ひであつて斯くは申さるゝことならん。若しそれなら……ナショナル・エコノミーの代はりにヒーローイック・エコノミー（武士道経済学と訳しては如何）としたら宜からうと考へます。一国の政治、宗教、学問等何事を為すにも大なるエモーションを以てやらなければ到底大事業は成らぬものであります。……小さな衰弱しつゝある国に立派なエコノミック・ライフ（経済的生活）がないと同じく立派なる経済学も亦随て現はれ来る筈はないと私は断言いたします」<sup>62)</sup>と。5月例会での演説の結びにおける、経済学はひとつの「ソシアル・

61) 同上、731～733頁。

62) 同上、733～734頁。

「フ井ロソフ井ー」であるという主張と、この「ヒーローイック・エコノミー」だという主張とを重ね合わせてみれば瀧本の経済学観は明瞭となろう。瀧本は「ジャパニーズ・ポリチカル・エコノミーがあるべき」だという。瀧本にしてみれば、国家の隆盛なくして経済学は確立し得ないし、同時にまた経済学は国家隆盛のための経国の学問でなければならなかった。ここには、国家と経済学とは不可分の関係にあるとしていることに疑いをはさむ余地はなかったのである。

さて、瀧本誠一の演説を受けて田口卯吉がその批判に答え、経済学についての信念とでも呼ぶべき自らの確固たる考えを再説したのは同年11月例会（日にち不詳）においてである<sup>63)</sup>。

まず第1に、瀧本が田口の『日本開化小史』や『日本開化之性質』といった著作を取り上げて田口を経済学者として「賞め」たことに対して、田口はこれらで「御賞めを受けましてもそれほど有難くない」という。田口は人間社会に関する学問を2つに分けて、人間社会＝「人為現象」を「縦に切ったもの」が開化史や歴史哲理の領域であり、それを「横に切ったもの」が経済学の領域である、と説明している<sup>64)</sup>。経済学はコントがいうところの「ソシアル・ステチツク則ち社会静力学」である、と。第2に、田口は自分の主張がマンチェスター派のものだといわれることについて、「私はコブデン、ブライトには同意する、又アダム・スミスにも同意し、リカードにも同意するが、マルサス、ミル、ケアンズに対しては不同意をせねばならぬ」とことわった上で、自分がマンチェスター派だと見られることに同意すると共に、それがイギリス古典派＝正統派と同義とみなされることに異議を唱えている。またここで田口は、「講壇社会党主義」の一派からマンチェスター派があたかも労働者に敵対するかのようにいわれることに対して、「コブデンやブライトは実は労働者の友人であつて、労働者を助くる為に彼の穀物条例廃止の運動を始めたのである。……今日マン

63) 田口卯吉「経済学の性質に関して瀧本君に答ふ」『東京経済雑誌』第1110号（1901年12月7日）1133頁。

64) 同上、1134～1135頁。人間社会＝「人為現象」を「縦に切った」学問を田口は社会学とも呼んでいる。註31を参照。

チエスター・スクールと云ふと労働者に反対するもの、様に定義付けらるゝのは如何にも奇怪千万条理顛倒して居ること、思ひます」と反論している<sup>65)</sup>。次いで田口は第3として用意した論点を省略して、第4に「エコノミック・メン」「利己心」について答える。「利己心と云ふと誠に悪く思はれて経済学の愛敬を失つて仕舞ふ」のだが、アダム・スミスは「天下人々の利己心は社会を進歩せしむる」という意味で「利己心」を説いているのであって、「無形の手」（＝自然）が「此の如き理法を人性に与へて社会の幸福を図る」のである、と田口は述べている<sup>66)</sup>。第5に、経済学に「農工商と云ふ區別」をつけるのは学問的でないとする田口は、これを再度説明して、経済学では例えば人を区別するのに農業に属するのか工業なのかあるいはまた商業かといった形では区別しないのであって、「経済学で區別を付けます時は、例へば雇主とか雇はれ人とか、借手とか資本主とか云ふ意味で論じて仕舞ます」と述べる<sup>67)</sup>。第6に、田口は「学問」と「論策」との區別を力説する。すなわち「経済と云ふ文字は経国済民と云ふ文字から出たことは私は承知して居る。西洋のポリチカル・エコノミーも矢張り経国済民と云ふ意味と少々類して居る字と云ふことも私は言つて居る。併ながら私は経国済民と云ふことは学問でない、是は術であると云ひます。国を経し民を済ふは術である。学問と云ふものは所謂道理を説くものである。瀧本君は「世の中に理法は無い」と言はれるが、私は「世の中に理法はある、それを説明するのが学問である」と申します。「アダム・スミスが国富論を書たのは国民に向つて「富の性質は斯う云ふものであるぞ、それ故に法則を設けて貿易を妨害するのは富を得る道でないぞ、富を得る道は自由にするに如かず」と忠告したのであるから、是は経済学ではない、経済論である。サイエンス学問と論策、政策と混同されて居つては誠に困ります。瀧本君はドウしても学問と術、論策、政策とを混同されて居ると私は考へます」。田口は「富の性質は斯う云ふものである」と説明するところまでが学問であつて、「国家に

65) 同上、1135頁。

66) 同上、1136頁。

67) 同上、1136～1137頁。

向ツて斯う云ふ風にヤツて行けば宜いと云ふのは是は学問の応用」つまり論策だとして、「学問」の自立性をあくまでも求めている<sup>68)</sup>。第7に、オーストリア派の価値論に関する田口の「需用供給が行はれた結果ワリユーが生ずる」という理解に対して瀧本がそのような「漠然たるものでない」として批判を加えたことについて、田口は次のような解釈を提示して瀧本の批判に対抗しようとする。「例へば第一に食ツた米は功用が多い、二度目に食ツたのは効目が減る、三度目には尚ほ減ると云ふのは矢張り需用供給の結果です。詰り〔減少する需要に対して〕供給が余計あれば功用が減ツて来るのである。故に需用供給を離れてアウストリヤ学派の功用があるのではなくてアウストリヤ学派でも需用供給の結果限界効用が顕れるのであらうと思ひます」<sup>69)</sup>と。第8に、瀧本がケアンズは経済学を「物質的科学」と「心理的科学」の「中間の地位を占むるもの」だとしていると述べたことに対して、田口はケアンズの著作の本文をよく読めばケアンズは経済学を「物質的兼心理的の学問なり」とする見解であることは明らかだと反論し、そして田口はケアンズの見解をしりぞけて経済学は心理的科学だという自論を再び説いている<sup>70)</sup>。

田口の演説は、ここまで述べてきて、そして「是から本論に這入らなければならませぬ」という。すなわち第9に「経済世界の理法」を再説する。田口は「理法を人に説明するのが学問である。説明すべき理法がなければ学問はない」という上述の第6の論点で指摘したことをもう一度確認して、そして次のようにいう。

「私共は経済世界に於て一定不変のロー〔理法〕があると信ずる。……理法と云ふ以上は物質学に於ても心理学に於ても常に変わらないものでなければならぬ。同じ原因があれば同じ結果が生ずると云ふが理法である。エキザクト・サイエンスに於ても同じ原因が同じ結果を生ずる如く経済学に於ても同じ原因が同じ結果を生ずることである。「有物有則」と云ふことがある。何も原

68) 同上、1137頁。

69) 同上、1137～1138頁。

70) 同上、1138頁。

因が無くして結果が生ずると云ふことは私は認むることが出来ない」。

田口は、瀧本が先の演説で歴史派の経済学の方法を知るにはロッシャーではだめでクニースの著作にあたらなければならないと述べたことを受けて、さっそく瀧本からクニースの著書——書名は不詳——を借りるなどして、ドイツ語を読める者に助けを求めながらクニースの主張を理解しようと努めたようであるが、「ドウしても本当に意味が取れませぬ」と率直に述べている通り、クニースの難解な文章は田口の手には負えなかったと見られる。だが「併し」と田口は続ける。「歴史派と申しても凡て経済上の理法を総て非難するのでない。……歴史的経済方法を説く人の中にも過日申し上げましたロツシエルも矢張りエコノミック・ローを説き、又イングラムも説き、レスリーも説き、又日耳曼のワグネルも説て居る。たゞクニースだけが少し疑問である」。田口は歴史派と見なされる経済学者にあっても「エコノミック・ロー」が説かれているのだと強調する。そして、その「エコノミック・ロー」すなわち「経済の理法」とは「別に大した高尚なものでない。需要供給の法である」<sup>71)</sup>。最後に田口は自らが用いる言葉の定義を次のように明確にさせてこの演説を結んだ。すなわち「理法」とは「宇宙間にチャンと成立ツて居るもの」であり、その「理法」を説明する言葉が「原則」である。そして「理法」の複雑な関係を——「原則」に基づいて——説き明かしたものが、例えば「地代の学説」とか「外国為替相場の学説」といったように、「学説セオリー」もしくは「理論」と呼ばれるものである<sup>72)</sup>、と。

#### IV 国家主義と社会主義

さて、翌1902（明治35）年3月15日の例会では、木村亮吉が「独逸に於ける経済学研究法」と題して演説した。この日は40余名の出席者を数え、例会の記

---

71) 同上、1138～1140頁。

72) 同上、1141頁。



録には「近來稀に見るの盛会なりき」と記されている<sup>73)</sup>。木村は演説の冒頭のところで「尚ほ詳しいこと或は質問其他いろいろなる所は瀧本君が答弁される積りです」と述べて瀧本誠一に力を借り、また「或は田口君には攻撃を受けるかも知れぬです」とつけ加えている<sup>74)</sup>。木村の話題は歴史派とオーストリア派の双方にわたっている。

木村はまずドイツ歴史派の経済学を特徴づけて「十八世紀頃盛に行はれました個人主義の反対、所謂個人主義に対する所の反動の経済学説と看做して宜しい」という。すなわちドイツ歴史派の経済学は「国家といふものを主眼として居る」。そこでドイツの経済学の「遠因」をたずねれば、カメラリスト（官房学者）の研究法、次いで法学者サヴィニーの研究法がある。それに次いで経済学者として登場したのがリストであり、さらにロッシャー、ヒルデブランドトそしてクニースである。そのロッシャーが経済的諸事実の歴史研究のみならず「例へば法律上、宗教上、政治上から生ずる社会の研究をも併せて研究」せよと述べたことから、「之を悪しき意味に解釈しますれば、経済学研究の区域をも奔逸するやうに我々をして疑を生ぜしめ、或は迷はすやうになるの」だ、と木村はいつている。そして木村は「経済学の歴史的研究方法」を明確に述べたものとしてクニースの説を紹介する。すなわち「経済学の定説といふものは歴史的発達より生じたるものである。さうして経済学といふものはどういふものかといふと、時代と土地と国民の状況、即ち此状況に依つて発達を遂げる人間、若くは国民の歴史的時代に於ける機関の各種と密接の關係を持つて居るのは勿論、之が定説は国民の歴史的生活に影響をして居る。之が論結といふものは歴史的解釈を受ける性質を持つて居らなければならぬ。故にナショナル・エコノミーといふもの、定説には、之を概括する方則を定むることを許さぬ。唯順次に真理を発見して、斯ういふことが規則にでもなろうといふことを追序することは構はぬ。さうして今日に至るまでの真理を概括するの外他を許さないののである。尚ほ且之が実体上の關係即ち経済の実体上の關係、及び實質上の關係に

73) 『東京経済雑誌』第1124号（1902年3月22日）533頁。

74) 木村亮吉「独逸に於ける経済学研究法」『東京経済雑誌』第1129号（1902年4月26日）752頁。

於ても動かすべからざる定説を得たものと考へ損ねてはいかない。理論の確定説といふものは経済学の歴史的發達の唯一方を表明するの外他あらざるなり」。このように木村は歴史派経済学の特徴を説明している。この中で木村が「順次に真理を発見して」とか「今日に至るまでの真理」とか述べたところで田口卯吉が「確に真理といふことがあるですか」と口をさしはさんだ、と演説筆記録にはある<sup>75)</sup>。そして木村は、歴史派の経済学者はその研究において「社会の習俗」や「倫理」を重視するところから「倫理学派」とも呼ばれること、また「社会の政治組織」を重視するところから「国家学派」あるいは「政府干渉学派」とも呼ばれると説明し<sup>76)</sup>、経済学研究に対する歴史派の貢献を次のように述べた。「実に歴史的経済学派の貢献した所は経済学研究法に一新面目を開かした所謂<sup>(ママ)</sup>新正なる道路を開墾した。さうして所謂空理、理窟ばかりの觀念を排斥して、社会を組織する所の人間の實際に就いて研究しなければならぬといふことを唱へた。さうしてマンチエスター学派の夢を破つて仕舞つた。さうして吾人の最も賞賛すべき所のものは……経済政策の研究に余程大きな進歩を与へた」<sup>78)</sup>。

それでは他方、オーストリア派は如何にして生まれたのか。これについて木村は「此学派は独逸学派の歴史的研究方法が余り広汎なるが為めに、反動として此学派が起つたとも思はれる」と述べ、そして、オーストリア派の経済学の特徴を次のように説明する。「此学派の研究する方法は所謂實際に於ける所の経済の現象を碎き割つて、其要素を見出して、さうして一つの法則を発見して、一度発見した法則を是と類似のものに一樣に適用させやうといふ解釈を持つて居る」。そして「此学派がリカード学派と研究を異にして居る点は、経済上の人間を拵へて理論を定めるのではない。實際の人間を觀察して、抽象的でない所謂觀察的に、心理学的に、解剖に依つて実験を基礎として経済学を研究する

75) 同上、752～754頁。

76) 同上、754頁。

77) 木村亮吉「独逸に於ける経済学研究法（続）」『東京経済雑誌』第1130号（1902年5月3日）807頁。

78) 同上、808頁。

のであります」<sup>79)</sup>。そして木村はオーストリア派と歴史派との関係を次のようにいう。「此学派は歴史派とは決して反対して居らぬ。……寧ろ澳地利学派は歴史学派の研究を利用して、自己の学説を定めんとするのである」。「該学派が歴史派と異て居る点は、澳地利学派といふものは社会の成立つて居る所の細胞人間及び人間の概念を研究するのである。さうして歴史派はどうであるかといふと、社会全般に渉る総てのオルガニズムを研究するといふ点が違つて居るのである」<sup>80)</sup>。木村はオーストリア派の経済学にこう評価を下す。「此学派の研究した中で今日に於て経済学界に大なる利益を与へたものは価格の觀念に対する所謂精密なる解剖的解説と、其中に含む所の資本の論などであります。此等の学説は我々の大に参考とすべきものであらうと思ひます」<sup>81)</sup>。

以上のように木村は歴史派およびオーストリア派の経済学の研究方法を紹介した後、最後に次のように述べてこの日の演説を結んでいる。

「我邦に於て経済学の研究をするのには、どうも総ての学説が区々であつてからに学生などが経済学を研究するには、どういふ書物を読んだら本統の経済学説が分るであろうか、或はどれを読んだならば十分正しい最近の説が知れるのであらうかといふことに迷ふて居る。それですから此事に付ては我々が余程考を費さなければならぬ所であらうと思はれる。……それに付て私が考へますのには、固より経済学といふものを学びますのには、第一番に学説の系統を知るのが必要であらうと思ひます。さうして又経済学説といふものは歴史と非常に關係を持つて居る。……それですから経済学を研究するのには、其時代の学説の系統及び其の学派の現はれた時勢境遇を研究するといふことを以て甚だ利益なることであらうと思ひます」<sup>82)</sup>。

この木村亮吉の発言には、田口卯吉と瀧本誠一との間でくりひろげられた論争の後に続く者としての、「学説」を学ぶに際しての着実な姿勢と経済学史研究の意義についての自覚とが、ようやく見出されるのである。

79) 80) 同上, 809頁。

81) 同上, 809～810頁。

82) 同上, 810頁。

そして同年6月の例会（日にち不詳）ではマルクスの経済学説が紹介された。それは大原祥一による「社会主義の経済説を評す」と題された演説である。大原はまず初めに「近来社会主義の声は到る処に喧伝さるゝ様にな」ったとして、ドイツ、フランス、オーストリア、アメリカ等における社会主義政党の伸張を黨員数や議員数を挙げて示し、「近頃では我日本にも多少の社会黨員が出来て一の社会党を組織して居る」と述べる<sup>83)</sup>。片山潜、幸徳秋水、安部磯雄らが社会民主党を結成した（即日禁止）のは、この演説の前年1901年5月のことである。では社会主義とは如何なるものであるのか。大原はそれを広狭二義に分けて考えている。すなわち広義の社会主義とは「個人は多数人民の幸福を増進せんが為に社会に服従せざる可らず」というものであり、ここには、アリストテレスが「国家は自然的に個人及び家族に優りたるものなり」ということも、またドイツ歴史派の経済学者ヴァーグナーが「社会主義とは社会全体の必要に随て国家が個人の社会的及び経済的生活を支配するを可とする主義なり」とした定義も含まれる。大原は、今日「心を政会改良民福増進に致します者は悉く広い意味に於て社会黨員であらうと思ふ。此く申す私も広い意味に於て社会黨員であると断言するに憚らない」と述べる。他方、狭義の社会主義とは「生産に関する諸器械財産等即ち土地及び資本を社会の共有となし国家をして凡て富の生産及び分配を司らしむるの主義」（傍点原文）である。そしてこの社会主義の成立には4つの要件があるという。すなわち、①「社会全体は生産上必要な器械及び財産即ち土地及び資本を共有にすること」、②「国家が自ら生産を司ること」、③「国家が生産した所の富を自ら分配する」こと、④「消費的財産即ち楽器とか食物とか自転車とか富の生産をなさざる物品の私有を可とすること」である<sup>84)</sup>。社会主義にも種々の説があるが「今日の科学的社会主義なるものはカール・マークスに濫觴したので」あって、「其の経済説は取も直さずカール・マークスの「資本論」から出て居る。この「マークスのダス・カピタルは聖書が耶蘇教信者に於けるコーランがマホメッド教徒に於けると同じ様に

83) 大原祥一「社会主義の経済説を評す」『東京経済雑誌』第1139号（1902年7月5日）15～16頁。

84) 同上、16～17頁。

社会主義者の間に勢力を有つて居る故にマルクスの経済説を評するは社会主義の経済説を評すると同じ意味」であると大原はいう<sup>85)</sup>。

そこで大原はマルクスの経済学説の説明と論評へと話を進める。第1に「マルクスは他の社会党員と同じく財産私有制度を否認した」。財産私有制度を否認する人々はその主張の根拠として「個人は元来財産を所有する自然の権利を有して居らない」ということをいう。だが大原はこれを批判して、「元来自然の権利などと云ふ権利はありやしない」と述べる。「権利は凡て社会的のものである。……で必要は権利を生ずで今日財産私有制度が存在して居るのも個人が自由財産を所有する権利を有して居るのも皆必要がさせたので」と大原は主張する。第2に「マルクスは資本の沿革を論じて遂に有名なる残余価格の説 (Theory of Surplus Value) を説いて居」る。そこで大原は「残余価格の説」の説明を次のように試みている。「簡単に説明致しますればこう云ふので御座います。此処に或る物品が生産せらるゝ其の物品は或る価格を有つて居る。早く云へば三円だけの価格を有つて居る。で此品物を造るに労働者は一日の労力を費し一日の労力は一円とすれば資本家は二円の利を見る。亦労働者の側から云へば労働者は己れの受くる賃銀よりも多き価格を作るのである。即ち労働者が賃銀よりも多く産出せる価格換言すれば資本家が生産の費用を払ひ去つた後の価格が此のサープラス・ヴァリユー……残余の価格で御座います」。そして「マルクスは現今の資本制度は労働者が如何に多額の価格を生産するも僅に生活に足るものを賃銀として供せられ残の価格は資本家が取つて仕舞ふ悪制度であると云ふて居る。亦労働賃銀とは労働者が僅に自己の生命を保ち子孫を増殖するだけの費用であるから労働者は常に貧乏して永遠的に資本家となることが出来ない……と云ふ説で御座います」。この剰余価値学説について大原は「マルクスの議論は一応尤には聞〔こえ〕ますが貧困とか低廉なる賃銀とか云ふものは決して一の残余価格説に依つて説明せられ得ぬものである」と論評する。つまり貧困や低賃銀の要因には個人的、政治的、経済的あるいは自然的な種々の

85) 同上、18頁。

事柄があるというのである。第3に「マルクスの価格説は労力価格説（Labor Theory of Value）」である。これは「アダム・スミス及びリカードの労力説を引き延した説であ」って、「マルクスは労力を以て価格の唯一的原因として居る」。そして「価格の定義を下して云ふのには価格とは無形労力の分量を云ふ。労力の分量は労働時間に依つて計算さる。而して労働時間とは社会的に必要な労力の活動時間（ソシアリー・子セツサリー・タイム・オブ・レーボア）と云ふなり」。大原はこの労働価値説についても批判を加える。すなわち「或る物品が価格を有して居ると云ふのは物品其の物自身が価格を有して居るのではなく吾人の其の物品に対する認識にして其の物品は社会的効用（ソシアル・ユティリティー）及び労力を有して居らなければならない」と。大原がいうのには、物に価格があるのはそれを「作るに労力が必要であるから」だけではなく、それが「社会的に有用であるから」でもある。したがって「価格の要素は社会的効用と労力二つで決して一つではない」と大原はいうのである<sup>86)</sup>。

大原は「マルクスの価格説は即ち彼の経済説なので御座います」と述べており、マルクスの経済学説の主題を価値論に見ていたようである。その価値論についての大原の理解は曖昧なところが多く、また誤った説明も見られる。大原は次のように述べてこの日の演説を結んだ。

「マルクスの経済説即ち社会主義の経済説は間違つたもので吾人は到底賛成することは出来ない。勿論社会党の云ふ所要求するもので立派なものがある。真理のものがある。之等は悉く善きものとして認識し且つ賛成せねばなりませんが、土台となつて居る経済説は間違つたものであるから之に賛成することは出来ません」<sup>87)</sup>。

ともかくも、こうして経済学協会においてもイギリス古典派、ドイツ歴史派そしてオーストリア派と経済諸学説についての理解がわずかずつながら進んでゆくなかで、さらにマルクスの経済学説の紹介が加えられたことになる。

---

86) 同上，18～20頁。

87) 同上，20頁。

## む す び

「学問と云ふものは自然の理法を説き明かすものでござります」と田口卯吉はくり返し説いた。「自然の理法」は田口にとって、その言論の拠り所であった。それのみならず、「自然の理法」は田口の生きる拠り所であったとすらいえるのではないだろうか。

「自然の理法」は何にたよるものでもない、それ以上のものでもそれ以下のものでもない、それ自体が一個普遍のものである。田口はいう。「経済学も一の学問であるならば、矢張り自然の理法のみを研究するものであらふと思ひます。国家の爲めに斯うしなければならぬ、ああしなければならぬ、人間は斯うするが宜い、ああするが宜いと云ふなら、是れは学問ではない。唯人間社会と云ふものは斯う云ふ風に成立つて居るものだ、斯う云ふ自然の理法が行はれて居るものだ」と論じるのが経済学である<sup>88)</sup>、と。この田口の学問についての、また経済学についての確信は、新しい学問の潮流を前にしても、まったくゆらぐことがなかった。田口はまた論争を歓迎した。歴史派経済学の方法をめぐる瀧本誠一との間で論争を展開した演説のなかでも田口は「諸君と共に斯ういふことを研究しまするのは、自分が本を読む端緒にもなり、日本の経済思想を発達せしむるに益があらうと思ふ。付いては若し飛入なり、何なり、御演説になりますやうならば、私は喜んで拝読いたします」<sup>89)</sup>と述べている。経済学協会の例会における経済学の「新派」の紹介と、それに取り組む会員の熱心さは、そこに集う人々にとってはもちろん、田口にとっても刺激を与えるものであったはずである。田口はそれらの論議のなかでもって自己の説をますますとぎすませていったように思われる。

田口は「経済学の教授法を難ず」と題する論稿でこう述べている。

「蓋し経済学は人類が互に相交易し、其の生産を容易にし野蛮の時代より進みて文明の時代に赴き、社会自然の作用に依りて其の幸福を増進するの有様

88) 註7に同じ。

89) 田口卯吉、前掲「経済学は心理的科学なり」『東京経済雑誌』第1088号、19頁。

を序述するものなり。若し夫れ人類社会にして政府の施政なくば、輸出入平衡を保つを得ず製産工業調和するを得ざるが如きものならば、世豈に経済学と云ふものあらんや。学とは自然の理法を序述するものなり。若し人類社会にして立法の干渉に依りて初めて成立し得べき程不完全のものならば、是れ経済は学にあらずして術なり。人類社会の太古より今日に至れる所以のものは社会の自活力にあらずして、代々の政治家の手腕の結果なりと云はざるを得ざるなり。天下豈に此の如き理あらんや。然るに今の官民学校に於て経済を教ふるもの何ぞ経済学を説くものなくして単に経済術を説くもののみなるや」<sup>90)</sup>。

この田口の主張を理解し得た人はどれほどいたであろうか。「社会政策」派が台頭するなかで、あくまでも「社会の自活力」に期待をかける田口は、やはり孤立してゆかざるを得ないであろう。田口の「経済学はメンタル・サイエンスなり」とする主張は、そこに確かに田口のオーストリア派への接近を認めることはできるが、しかしそれは田口がオーストリア派の著作から十分に学んだ結果だということにはならないであろう。田口がそうした著作に自身で取り組んだといえる証拠は見あたらない。むしろ、経済学はメンタル・サイエンスであるという主張に行きついたことには、経済活動も含め人間の行動の究極的な拠所は「自然の理法」に支えられた自己自身のうちにしかあり得ないという田口の——孤独な、しかし確固とした——思いが、どこか深いところでもすびついて、と思われてならないのである。

90) 田口卯吉「経済学の教授法を難ず」（1901年9月）『鼎軒田口卯吉全集』第3巻所収、406頁。